歴史、産業の街で学ぶ

名古屋経済大学 佐々木雄太学長 70

名古屋経済大学がキャンパスを構える愛知県犬山市は、古い歴史と文化が根付き、農業・工業都市の顔を併せ持つ。佐々木雄太学長(70)は「学生にとって興味深い素材が多く、地域全体が学びの場だ。自ら課題を発見し、体験、経験を通じて学ぶ力を身につけさせたい」と語り、地の利を生かしたフィールドワークを積極的に進める。（聞き手・編集委員 荒川盛也）

名古屋経済大学　1907年に開校した名古屋女子商業学校が起源。79年、市邨学園大学を開学し、83年、男女共学制に移行するとともに名古屋経済大学と改称した。犬山、名駅サテライトキャンパスで、経済、法、経営、人間生活科学の4学部5学科、大学院、短期大学部に約2000人が学ぶ。卒業生は約5万人。

――「学ぶ力」を身につけることに重点を置く理由は。

基礎的な知識やスキルの習得は大切だが、科学や技術は日進月歩で進化し、東日本大震災を経験して社会の価値観も変わりつつある。世界は変化の時代、予測不能な時代に向かっている。こうした時代には、覚え込んだ知識は役に立たない。未知と遭遇した時に、そこにある問題を見定め、解決の糸口を発見する力が必要だ。時代に即応できる力、自ら学び続ける力を養うことが何よりも重要だ。

＊共通科目を新設

――そのためにどんな取り組みをしているのか。

学生はそれぞれの専門性を通して社会人としての力を身につけるが、何もかもを学ぶことはない。専門の基礎的知見や考え方をしっかり学び取ることが肝要だ。そこで、カリキュラムを見直した。「学生に何を、どこまで」という観点で科目を精査し、1、2年生で学ぶ「専門共通基礎科目」を新設した。

法学、経済、経営3学部の学生が、自分の専門基礎を徹底して学ぶとともに、隣接する領域の基礎的な素養を身につける。法に関する基本的な知見を備えた経済学士や、経済、経営の基礎を身につけた法学士を養成する。社会を多角的に理解する力をつける狙いだ。

＊地域と連携の場

――フィールドワークが盛んだ。

「主体的な学び」へのきっかけを作るため、「自ら学ぶ体験」を提供するのが目的だ。主として犬山市の歴史、文化、自然、産業を素材に約20のプロジェクトを計画している。担当教員と学生が地域に出向いて様々な取り組みをする。「体験型探究科目」と呼んでいる。若い感性で犬山の観光戦略を考える、小学生と町を歩いて安全マップをつくる。こうした取り組みから、課題を引き出すことを期待している。

――そのためには地域との連携も不可欠だ。

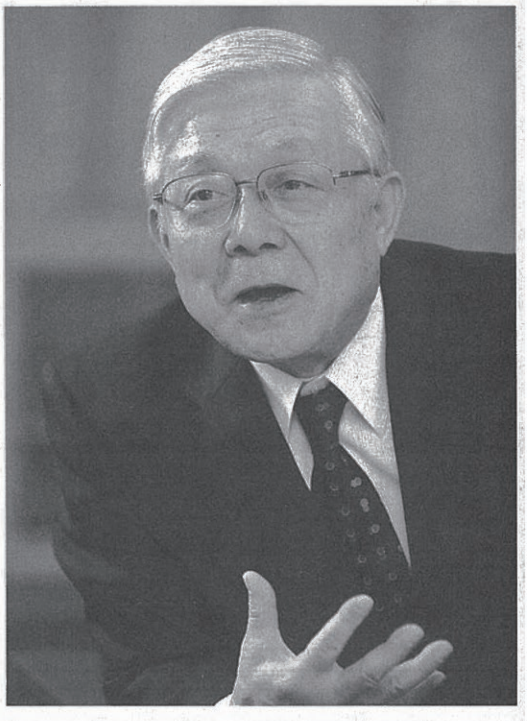
犬山市や隣接する小牧市、両市の商工会議所と連携交流に関する協定を結んでいる。それぞれが持つ知的資源、情報を共有して地域振興を進めるのが狙いだ。今年度は、大学に「地域連携センター」を発足させた。地域経済や農業経済が専門の教員をトップに据え、市や商工会議所と協議を重ねている。このセンターを拠点として、学生とともに地域のあり方を考えていく。

＊社会人の履修支援

――社会人や留学生を含む学生への支援も手厚い。

学び直したいという社会人のために、入学金、授業料を3割引いている。仕事や家庭の制約で、4年間では卒業が困難という社会人のためには、4年分の学費で6～8年かけて卒業を目指す長期履修制度も導入した。今後は留学生の受け入れも増やし、一般学生、社会人、留学生が相互に刺激し、切磋琢磨するキャンパスにしたい。

（毎週月曜日に掲載します）



1943年、北海道生まれ。京都大学法学部卒、同大学院法学研究科政治学専攻博士課程中退。大分大学助教授を経て、85年名古屋大学教授。法学部長、副学長を務めた後、2004年愛知県立大学学長。12年4月から現職。法学博士。中央教育審議会大学分科会臨時委員・大学教育部会長。趣味は音楽鑑賞。

学生へ一言　背伸びして挑戦を

「卒業後にはこうありたい」という思いをしばしば確かめながら、「積極的・主体的な学び」を重ねてもらいたい。受け身の学びは身に着かない。目標に裏づけられた「主体的学び」の成果は、想定外の状況に出合った時、問題を解決する力になる。今の自分に満足せず、目標を立てて一つひとつ達成する。それが自信となり、次の目標が見えてくる。ちょっと背伸びをして挑戦してほしい。